

III 教育社会学研究の評価と期待

教育社会学への期待

—新しいパラダイムと課題—

宮島 喬

社会問題としての教育問題へ

さまざまな社会学的研究対象のなかでも、教育という事象はやや特別な位置にあると感じられる。教育とは、日々切実な問題が投げかけられてくる強く実践性の問われる領域であり、いかに客観的な研究をめざすにせよ、ここでは単純に価値自由的なスタンスをとることができず、したがって理論的一般化とか、自己目的的な理論構築といった作業の進めにくい面もある。この点はさらに次のようなことにも関係している。教育と社会との接点は、教育現場やジャーナリズムによって頻繁に言及され、このためセンセーショナルに扱われやすい。いいかえると、現象と問題がとくなくないまぜにされ、区別されにくいのである。たとえば、「校内暴力」「いじめ」「登校拒否」「落ちこぼれ」といった形で取り上げられるさまざまな教育問題とは、いったいどの次元のものなのだろうか。かつて日本教育社会学会でも課題研究に「いじめ」問題を取り上げ、セッションのなかで定義をめぐって議論が生じ、あるいは議論のレベルがくいちがい、問題の扱いのむずかしさが浮き彫りされたことは記憶にあたらしい。この点では、現代日本の教育問題を論じた副田義也(1987)が、現象としての教育問題と、社会問題としての教育問題を区別することを提唱していることは、傾聴にあたいすると思われる。

「社会問題」なるものを、およそ社会生活に関わる問題いっさいと、プラグマティックにとらえるか、それとも現代社会の基礎的な構造原理とかかわらせて多少とも特定のとらえるか、で見方は分かれるかもしれない。60年代以降の欧米の教育社会学の展開のなかで力づよい動きをなすものは、後者であるように思われる。その焦点の

お茶の水女子大学

教育社会学への期待

一つは、階級・階層間の不平等の体系を、教育・文化における不平等（たとえば学業成績の不利）へと変換してとらえようとするもので、バーンステイン、ブルデュー＝パスロンらが先鞭をつけた階級的不平等論からの考察がある。これを総称し、しばしば（文化的）再生産論とよぶことが行われる。なお、これは、エスニック・マイノリティの文化的不利あるいは剝奪の現象を説明するうえでも援用されうるものである。教育社会学の分野にあたえられた画期的なパラダイムという意味で、これはJ. カラベル（訳書、1980）らによって「新しい教育社会学」と命名されている。

しかし、わが国は、「学業成績の階層差」といった形の問題の定式化にかならずしも十分になじんでこなかった。おそらく、日本の社会はより開放的、流動的であるとする通念（かつ幻想）のゆえであろうが、これにはさまざまな反証もあることは周知の事実である。そして、この点については筆者は次のように考える。日本社会が不平等な格差をはらんだ少なくとも階層的な社会であるにもかかわらず、なぜその事実が問題として顕在化しないのか、さらにいえば、なぜ教育の領域でこの事実が「機会の不平等」等とかかわらせて正面から問題とされないのか、がもっと問われなければならない。極論をするなら、この問題はそれ自体、わが国の教育社会学研究の最大のテーマでなければならないと思う。

階層と教育——残されるブラックボックス

とするならば、『教育社会学研究』第42集（1987年）がその特集に「階層文化と教育」をとりあげたことは、注目されてよいのではなからうか。

藤田英典（1987年）の冒頭の課題提示論文がものがたるように、ここではやはり上記「新しい教育社会学」の再生産論のインパクトがかなり大きく、階層構造という不平等の社会体系の「再生産」に教育がどのように寄与しているかという、筆者流に言えば社会問題からのアプローチの重要性が押し出されている。この号では、日本社会のマクロな趨勢分析としてのSSM調査にもとづき、「階層構造の開放性」や「メリトクラシー」を操作的に定義し、定量的にとらえようとした直井優の論文（1987）は、一つの極に位置するものであろう。また、金子元久の論文（1987）も定量的考察に属するものであり、階層による進学率格差の現状の批判的考察として、適切な指適をふくんでいる。いずれにせよ、これらの研究も、単純な階層上昇移動モデルや「機会均等」の理念に疑問を呈して、再生産モデルをいわばその仮説のなかに織り込んでいると思われる点は、基調の変化として注目したい。ただし、これらでは、教育が階層構造の維持または変動に具体的にどうかかわるかという過程は、ほとんどブラックボッ

クスのままにおかれている。他方、わが国では社会的不平等問題と教育問題とをつなぐ数少ない領域として、ある程度研究蓄積のあるものに同和地区（被差別部落）の教育の研究がある。そして、この特集号の池田寛論文（1987）は、同和地区の「機会構造」および「文化」（実は「文化支配」）へと考察を進めることで、差別と低学力との関連をあきらかにしようとした。これは今後、他のさまざまなマイノリティをも対象に、教育社会学が深く鉤を入れるべき問題領域であるといえよう。

その後、宮島、藤田ら（1991）は、文化・言語資本の階層ごとの配分の不平等をある程度実証する作業を行ってきたが、ここでも学校内部の相互作用過程には十分立ち入ることができず、上のブラックボックスはやはり十分解明されないまま残されている。

ところが、このマイノリティ問題も含めて、わが国における不平等のシステムは欧米社会にくらべてとらえにくいといわれる。階層文化やエスニックな特性の相違がヴィジブルではなく、「同質幻想」が現に強いということからして、それはおそらく事実であろう。だが、可視的でないということは、不平等の問題は重要ではないことを意味しないし、まして不平等の事実が存在しないということではない。見えにくいものに光をあて、それを可視的にすることは、いかに困難であれ、科学の課題でなければならぬであろう。ブルデューとパスロンが『再生産』の序のなかで、「おおい隠されたものについてしか科学は成り立たない」と述べているのは、現代教育社会学者のエートスを論じたものと受けとるべきではなからうか（訳書、1991、12頁）。

「解釈論」的アプローチ

実は、上の言葉を引いたのも理由あつてのことである。社会問題としての教育問題への新たなアプローチとして、もう一つ無視できないのは、これまたハルゼーら（1980）の言葉を借りれば「解釈論的」なアプローチである。そして、再生産の社会学も、すでにそのような要素を内にくみこんで成り立っているといつてよいかもしれない。「解釈論的」というと、ただちに思い浮かぶのはエスノメソドロジーや現象学のアプローチであるが、ブルデュー＝パスロンの分析視点もまたこの要素をもっている。一方で社会階級と進学率との関連といった巨視的な問題をあつかいながら、かれらは他方では、「ハビトゥス」「文化的恣意」などのタームに拠りながら、常識的に自明視されている教育的相互作用のカラクリをあばいている。たとえば、教育という文化伝達はいちじるしいディスコミュニケーション（誤認）を含むにもかかわらず、なぜ教師の権威を維持させることができるのか、これを可能にしている人々の性向、態度、知

教育社会学への期待

覚の様式としてどのようなものがあるか、を論じている。なお、「目に見えない教育方法」への批判的解明へとむけられたバーンステイン（訳書、1980）の観点も、ここに広く含めることができよう。この意味では、教育における「正統性」がどのように構成され、機能しているかについての批判的考察こそが、かれらの社会学の核心なのかもしれない。巨視的な階層構造の趨勢分析にとどまらず、例のブラックボックスを埋めようとする試みが、このようなアプローチを要請しているのであろう。ただし、上でもふれたように、学校内部的な過程に分け入った解釈論的アプローチにはいたっていないことは指摘されなければならないが。

以上の見方に立つとき、わが国の教育問題についてもこれまで自明視され、当然視されてきた価値観や判断基準で、かつその自明性を問いなおすべきものが少なくなっていくことに思いいたる。あの「受験戦争」のきわめて苛酷な選別をも人々に正統なものとして受け入れさせる文化的コンテクストはなにか。教育のためのきわめて高額な費用負担を、「中」や「中の下」階層にも当然とみなされる価値前提はなにをもって成り立っているのか、等々。

学校文化と階層文化

最後にもう一つのわが国の研究課題についてふれてみると、それは、わが国の学校文化と社会諸階層の文化やハビトゥスをどう適切にとらえるかという問題である。

「文化的同質性」というわが国の社会に付与されてきたイメージは、従来、こうした問いを立てることを困難にしてきた。一方、文化的再生産論からの問題提起は、学校に先だって、あるいは学校の外で生徒たちの生活をつつみこんでいる社会空間の文化的条件の相違が、学校における能力選別の基準とのかかわりで大きな意味をもってくるとする。とするならば、わが国でも、生徒たちの社会化のパターンや、言語行動の特質や、知・趣味の習得の様式が、階層等との関連で経験的につかまなければならない。だが、「同質幻想」「平等幻想」の強いわが国では、学校外的な条件の文化的有利、不利を問うこと自体になにほどこ抵抗もあり、問題への接近を困難にしている。

筆者自身もかねてからこの問題に関心を払ってきたが、階層文化の傾向について仮説を立てることに幾多の困難を感じている。たとえば階層の区分の仕方一つをとっても検討の必要があるし、またマスメディアの文化支配力の強いわが国では、たしかにその平面で相対的に文化的同質化への傾向はある。そして学校文化の特質をつかもうとするとき、わが国の規範文化の二重性という問題にぶつかる。いったい、わが国の

教育のなかで文化資本的なものとして機能しているのは、おもに西欧起源の知、能力、趣味であろうか、それとも日本的・漢字文化的なそれであろうか。また、口頭の言語能力なのか、それとも書き言葉の能力であろうか。こうした問題は経験的な研究としてはまだほとんど手つかずといってよく、仮説を立てることも困難で、当面、エクスプロラトリーな研究が先行せざるをえない。しかし、ともあれ、「同質幻想」のなかにとどまり、この種の問いを放棄することは、教育における隠された、しかし基本的な選別のメカニズムを看過することになる。これらさまざまな問題を抱えながら、「新しい教育社会学」の視点の導入によってわが国でも研究に新生面が開かれつつある。その成果を今後期待しよう。

〈文献〉

- B. バーンステイン (Bernstein), 1975, 「階級と教育方法——目に見える教育方法と目に見えない教育方法」, カラベル, ハルゼー編, 潮木守一他訳編, 『教育と社会変動』上, 東京大学出版会, 1980。
- 副田義也 1987, 「現代日本の教育問題」, 蓮見・山本・高橋編『日本の社会——変動する日本社会』東京大学出版会。
- 藤田英典 1987, 「『階層と教育』研究の今日的課題」『教育社会学研究』第42集。
- 池田 寛 1987, 「日本社会のマイノリティと教育の不平等」(同上)。
- J. カラベル (Karabel), A. H. ハルゼー, 1977, 「教育社会学のパラダイム展開」, 潮木守一他訳編, 上掲書。
- 金子元久 1987, 「教育機会均等の理念と現実」(同上)。
- 宮島喬, 藤田英典, 志水宏吉 1991, 「現代日本における文化的再生産過程——ひとつのアプローチ」宮島・藤田編『文化と社会——差異化, 構造化, 再生産』有信堂高文社。
- 直井 優 1987, 「現代日本の階層構造の変化と教育」『教育社会学研究』第42集。
- P. ブルデュー (Bourdieu), J. C. バスロン, 1970, 宮島喬訳『再生産』藤原書店, 1991。